

平成 19 年 3 月 19 日

各 位

株式会社ほくほくフィナンシャルグループ

## 「第 10 回業務監査委員会」の概要

「第 10 回業務監査委員会」の概要につきましては、以下のとおりであります。

今回の委員会では、18 年 11 月に見直しいたしました経営健全化計画ならびに平成 18 年度第 3 四半期決算等についての説明を行い、その後、各委員の方々から忌憚のないご意見を頂戴いたしました。

1. 日時 平成 19 年 3 月 16 日（金） 14:00～15:40

2. 場所 北陸銀行東京事務所

3. 出席者

<業務監査委員会メンバー>

（五十音順、敬称略）

石川 達 紘 北海道銀行監査役、元名古屋高等検察庁検事長、弁護士、亜細亜大学教授  
佐々木 亮子 有限会社アールズセミナー代表取締役社長、元北海道副知事  
丹羽 昇 富山大学経済学部教授  
河上 敏 嗣 当社常勤監査役

<当社出席者>

取締役社長高木繁雄、取締役副社長堰八義博、他常勤取締役 5 名

4. 当社からの説明要旨

経営健全化計画の見直し（18 年 11 月）について  
平成 18 年度第 3 四半期決算の概要について  
北陸銀行の創業 130 周年運動について

5. 委員からのご提言・ご質問等について（斜体文字は当方からの回答）

<経営健全化計画・決算関連>

従来、貸出金の伸びは住宅ローンの寄与が大きかった。今後、金利が上昇し、住宅ローンマーケットが成熟期に入っていくことを考えると、景気回復の中でも貸出金残高を大きく伸ばしていくのは意外と難しいと思われる。貸出以外のサービスによる役務収益の増強など戦略的に計画していく必要があるだろう。

・景気回復の地域の格差や企業の内部留保の充実から、貸出金残高が景気回復と平行に伸びていくことは難しいと考えている。新計画では、貸出金残高は増加に転じていく計画としているが、それほど大きな伸び率は織り込んでいない。

- ・住宅ローンについては、住宅一次取得層の年代人口の減少からマーケットが従来ほど伸びないが、商品やターゲットなどの工夫で貸出残高の下支えになるよう推進していく。一方で、これまで不良債権処理等でマイナスだった事業融資をどの程度増加させていけるかが課題と考えている。

自己資本比率は、高ければいいというものではないが、バーゼル の影響はどのように見ているのか。

- ・19年3月期は標準的手法となるが、現行BIS基準での比率からほぼ変わらない水準と試算している。20年3月期は内部格付手法の導入を目指して準備を進めているが、現時点では、若干比率が上昇すると試算している。

< リスク商品販売のコンプライアンス対応 >

投信・保険等のリスク商品については、環境が悪化すると顧客とのトラブルが出てくることも予想される。収益のための目標達成にとらわれてコンプライアンスの対応が疎かにならないよう慎重に対応していく必要があるだろう。販売時の商品のリスク説明など十分に徹底していかなければいけない。

支店にはコンプライアンスオフィサーが配置されていると思うが、ある程度、推進のラインと一線を画して、支店長に対してもしっかりと意見の言える態勢整備が必要。

- ・リスク商品販売に係るコンプライアンスの重要性は認識しており、これまでも、商品数を絞り込むことで商品の説明がしっかりできるようにするとか、お客さまの年齢や金融資産の状況に応じた対応を徹底するなどの取り組みをしている。
- ・引き続き、販売担当者向けの研修を充実させていくとともに、内部監査部署によるチェック態勢も強化して、対応を徹底していきたい。

< 地域支援の対応 >

地域の環境は引き続き厳しいところもある。単に資金を融資するという活動に留まらず、そうした地域を支える銀行としての役割を打ち出してほしい。

- ・地域の状況に応じてお客さまを支援するため特別な融資制度を作るなど、銀行の機能を通じて地域を支える役割を担うとともに、銀行が得意とする経営のノウハウ提供などの形で地域の自治体に協力していくことなども検討していきたい。

以上

お問合せ先

(株)ほくほくフィナンシャルグループ

企画グループ 北川 (076 - 423 - 7331)